

放課後事業インパクト評価について

2023.10



【仮説】

放課後の居場所の「質」の向上が、
こどもの短期・中長期のWell-beingの向上や
ドロップアウト予防（未病）に寄与する



投資対効果の実証をすることで、放課後への投資・予算増につなげたい



助成元：日本財団



慶應義塾大学
中室牧子研究室

現状の問題

【こどもの課題】

●幸福度の低いこども

- ・幸福度・自己肯定感の低下、自殺率上昇
- ・いじめ、不登校、暴力行為の増加
- ・孤独孤立、児童虐待の増加
- ・運動不足、体力の低下
- ・受験によるストレス
- ・発達支援が十分受けられない

●居場所がないと感じている こどもの増加

- ・物理的居場所がない
- ・社会的居場所(心理的安全に過ごせる居場所)がない

【放課後の課題】

●3つの間(時間、空間、仲間) が失われている

- ・習い事や塾で忙しくて自由に過ごせる時間が少ない
- ・こどもだけで安全に遊べる場所が少ない

●経済格差による体験格差 が拡大

●心理的安全に過ごせる 放課後の居場所不足

- ・学童保育の不足
- ・放課後の学校施設活用が進まない
- ・行政予算が少ない、運営資金の不足
- ・担い手の不足、低賃金
- ・従事者のマインドセット、こども理解やスキル不足

【社会(大人)の課題】

●子育てがしにくい社会

- ・多様性の理解に欠ける、不寛容
- ・(こどもに対して)無関心
- ・孤独・孤立、地域コミュニティとの関わりが少ない
- ・管理すべきという子育て感
- ・仕事と育児の両立の負担
- ・小1の壁
- ・時間的、心理的余裕がない

放課後の居場所の「量」と「質」を同時に増やしていく必要性 ⇔ 一方でなかなか増えない予算

放課後NPOアフタースクールが目指す社会

- **こどもの状態** 「こどもが幸せを感じながら、「生き抜く力」を育ていける状態」
- **社会の状態** 「すべてのこどもに居場所と出番がある社会」
「みんながみんなのこどもを育てる社会（地域・社会でこどもを育てる）」

● 社会的に顕在化していない価値（現場の体感に基づく仮説）

- ・得意や好きの探究やリーダーシップが発揮できる環境
→ **自己肯定感・自己効力感・主体的な選択・非認知能力向上**
- ・多様な人と触れることでこどもを見守る視点が增える
→ 多様な見方で認められる・**社会関係資本**が増える
- ・居場所ができる、つながる
→ 非行防止、**ドロップアウト予防（未病）**につながる効果

● 顕在化しないことによる影響

国や自治体として投資されない
場所・枠組みがあるが
教育的効果やWell-beingにつながるポテンシャルが知られていない

● 社会インフラとしての小学生児童（すべてのこどもを対象とした）の量と質、両方を満たす放課後の居場所

何を

放課後で何が提供されうるのか
（多様な体験、自分で過ごし方を決める、多様な人と出会う、好きが見つかる、自分らしくいられる、生活面での安心安全）

誰に
対して

ユニバーサル・ポピュレーション：すべてのこどもが対象（*参考資料）

現状の特別な社会的支援を要しない子

虐待・ネグレクト

経済的支援が必要な家庭の子

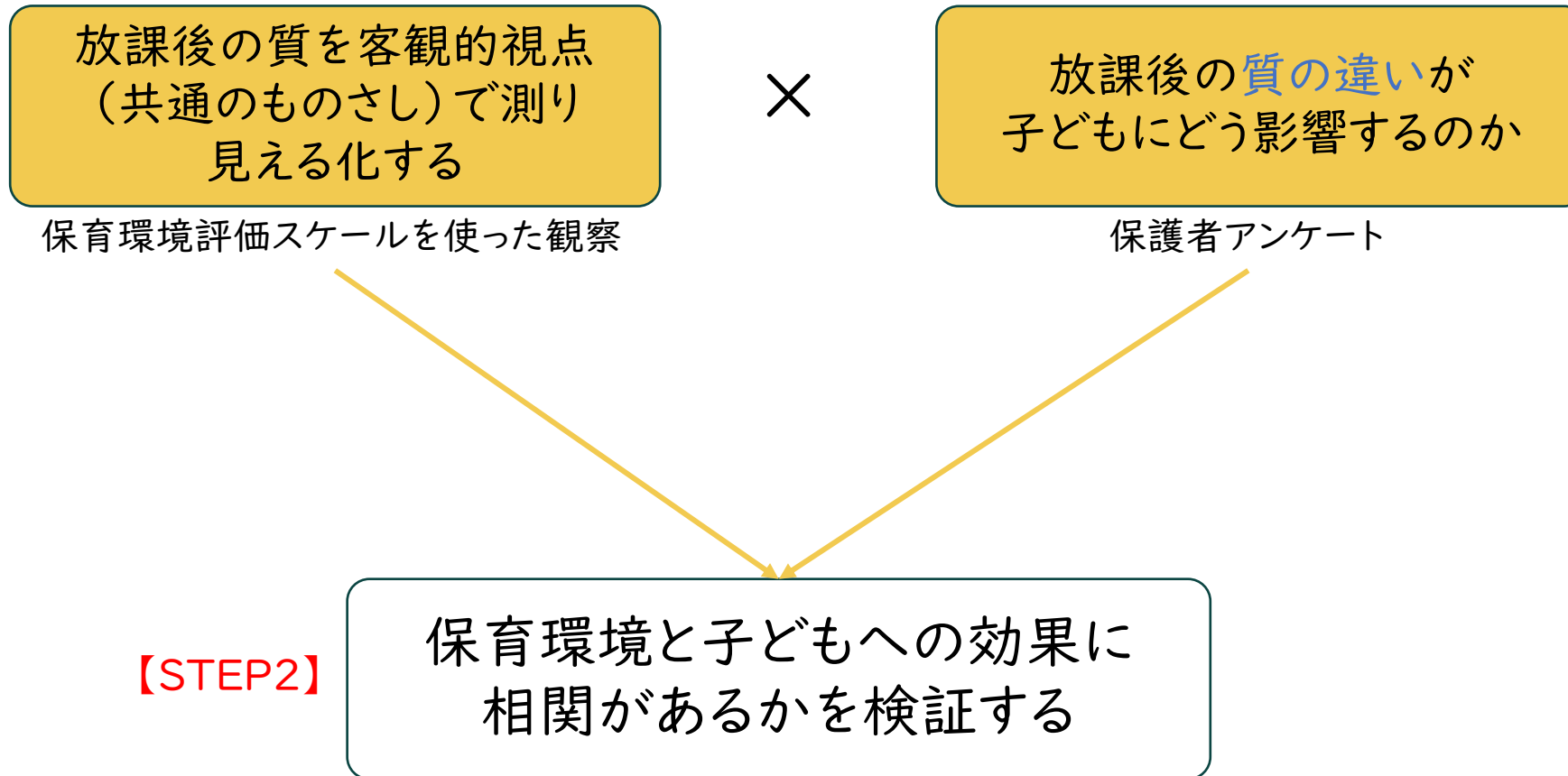
不登校児童

障がい・支援級児童

※ここでの「放課後」=狭義の放課後（学童・放課後こども教室など国の施策として全国的に提供されうる居場所・アフタースクールなど）

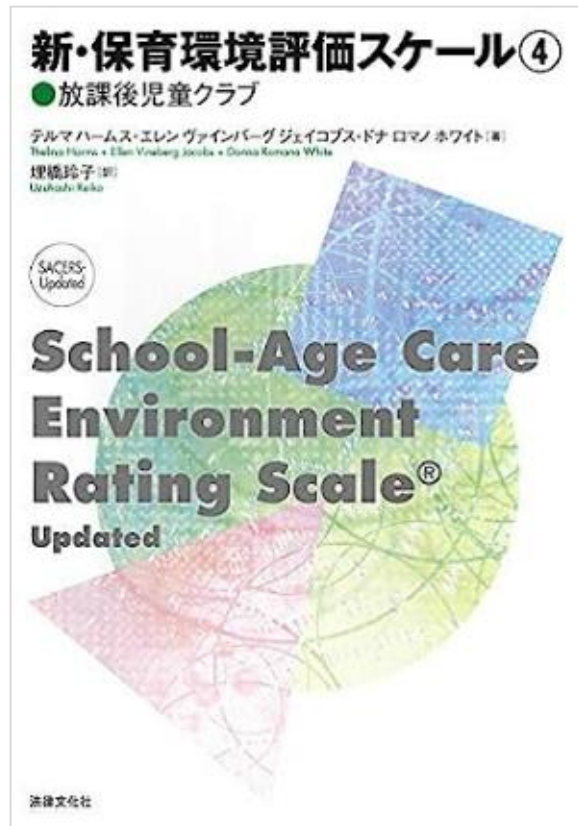
※（参考）発達支援等要配慮児童の利用率（全体利用児童に対して）17～40%/拠点（弊団体調べ）

【STEP1】放課後の質を客観的に測り、それが子どもにとってよい効果をもたらしているか検証する



調査研究の進め方

- 放課後の居場所の質や環境の違いが、子どもへどのように影響するか調査・分析を行うにあたり、まずは、質の見える化（現状把握）を行う。必要に応じて、現場へのフィードバックや環境改善につなげる。



- 保育園や幼稚園では保育の質の評価スケールとしてすでに活用・調査研究が進んでおり、自治体間の平均の差はほとんどないが、同じ園の中でもクラスごとの保育環境や質の差を明らかにすることができる、と言われている。
- 今回は放課後児童クラブ版のスケール（SACERS ※サッカーズ）を活用。
- 海外で利用されている信頼性・妥当性の高い評価スケールだが、日本の放課後においては本格的な導入事例がほぼなく、慶応義塾大学中室牧子研究室との共同プロジェクトにおいて放課後での第三者評価ツールとしての効果検証を行う。
- 将来的な運用においては、第三者評価として外部評価員が評価する方法以外に、セルフチェックとして活用する、または拠点間で支援員同士が相互チェックとして活用する等の活用方法も考えられる。

外部専門家の知見をお借りして調査研究として実施します

【調査研究実施】

慶応義塾大学 総合政策学部
中室牧子先生



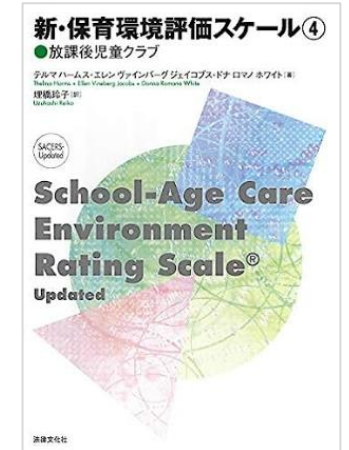
教育経済学

「教育に科学的根拠を」

- ・「質の高い保育」が就学後の認知・非認知能力に与える効果
- ・教育の「質」が子供の学力や非認知能力に与える影響

【監修】

大阪総合保育大学
埋橋玲子先生



保育学・保育の国際比較

「ECERS」「SACERS」の訳者・第一人者

[20180412-05.pdf \(nier.go.jp\)](#)

今回の調査において調査監修に入らせてくださっている埋橋玲子先生の発表資料。ECERSの成り立ちや海外での研究事例などがわかりやすい。(2019年)

[認可保育所における幼児教育・保育の質に関する評価の実施と課題 \(cao.go.jp\)](#)

認可保育所においてECERSを用いて保育の質の評価を行ったところ、何も介入をしていないにも関わらず、ECERSの評価を実施しフィードバックをしたところ、経年で保育環境のスコアが改善していった。

[RIETI - 福祉サービス第三者評価と保育の質との関連:現状と課題](#)

自治体において実施している保育園の第三者評価とECERS(保育環境評価スケール)での評価結果とを比較した研究。一般的な第三者評価の結果は、子どもの発育状況、就学後の学力、保護者の子どもに対するポジティブな感情のどれとも無相関であったが、ECERSではいずれも正の相関がみられた。

今回利用するSACERSは、日本での調査研究における活用事例はありませんが、ECERSをもとに学童期の子どもたちの発達段階を考慮して項目が設計されており、保育環境と子どもへの影響を調査するには最も妥当性、信頼性がある可能性が高いスケールであると考え、本調査において活用することにしました。

- 保育評価スケールを活用した放課後の居場所への第三者評価の実施

調査対象

アフタースクール及び放課後児童クラブ
※調査に資するサンプル数に最低限足る拠点数で調整予定。

調査期間

2023年度夏以降～12月頃を目途に評価観察担当者が放課後の活動場所を順次訪問
分析(2024年4月ごろに報告書作成)

ポイント

調査実施にあたって、現場スタッフの方のご負担は最小限になるよう配慮。

- ・観察の所要時間は3時間程度
- ・観察中は、活動の妨げにならないようにする(コミュニケーションはしない)
- ・観察後の支援員へのインタビュー(30分程度)

可能であれば、上記に加えて利用している子どもや保護者へのアンケート調査を実施したい。

- 放課後の居場所の質や環境の違いが、子どもへどのように影響するかについての調査・分析を行う

市・担当課にとっての メリット・意義

保育環境評価スケール(SACERS)を活用する場合

- 質を見える化することで、各施設ごとの状況を自治体担当課において把握ができるようになる。
- 市の中長期の放課後事業の取り組みの課題発見や方向性検討の材料としてご活用いただける。
- 仮説に基づく投資対効果が認められた場合、放課後事業への予算増の根拠とすることでより市内の放課後の活動充実につなげることができる。
- 放課後児童クラブの第三者評価は、保育園に比べても導入が遅れており、放課後子ども教室や一体型においては実施事例が国内では存在していない。先進事例として発信されることで、市の子育て支援環境の充実アピールにつながる。

スタッフにとっての メリット・意義

- これまで現場で言語化されることが少なかった課題感を担当課と共有できることで、現場だけでは解決が難しい課題について協力して解決する動きにつなげることができる。
- 評価結果を現場スタッフ間での対話のきっかけとして活用することで、スタッフ間の目線合わせや支援員の育成につなげることができる。
- 定期的に第三者評価を継続することで、改善の工夫等の効果をフィードバックとして得ることができる。

- 放課後の居場所の質や環境の違いが、子どもへどのように影響するかについての調査・分析を行う

受益者にとっての メリット・意義

- ・保護者にとっては、子どもが過ごす環境に対して第三者評価と質向上の取り組みが継続的に行われることで、安心・信頼が増す。
- ・安心して子どもが過ごせる場があることで、育児負担の軽減や就労意欲等につながる。
- ・子どもにとっては、第三者評価を踏まえた環境改善の取り組みが進むことで、放課後の場で「居たい」「行きたい」「やってみたい」をより感じられるようになる。

その他

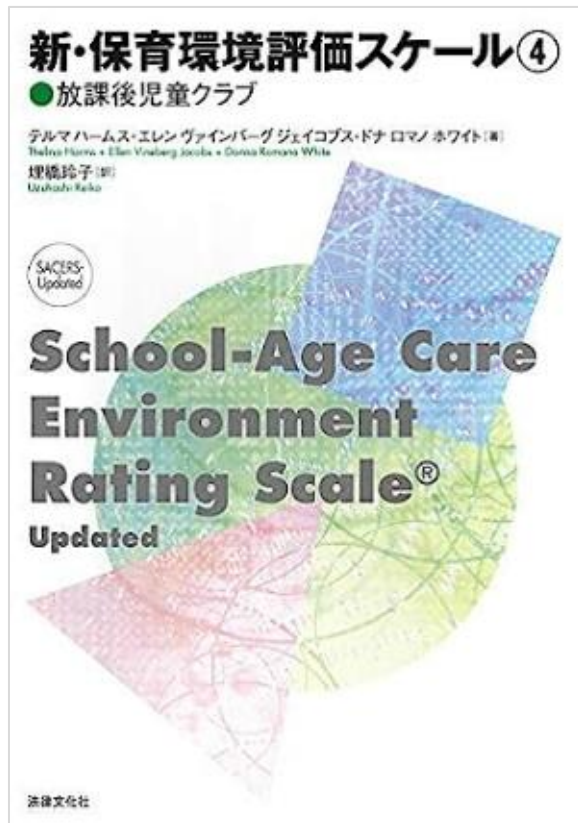
拠点評価に基づき、何らかの取り組みテーマが顕在化した場合、評価結果を踏まえた研修の実施や、現場が本評価結果を前向きに受け止め環境改善のPDCAを自走していけるよう、ニーズに応じて課題解決方法を一緒に考え、ご提案いたします。

例) 支援員研修テーマ例

- ・少ないスタッフで安全と活動充実を両立するには
- ・子どもが落ち着く環境デザイン、動線設計
- ・子どもの主体性を引き出す環境づくりと活動設計
- ・地域人材を活用した体験活動の充実

保育環境評価スケールについて

SACERS = School-Age Care Environment Rating Scale



- School-Ageにあるとおり、学童期の子ども達の発達により良い保育環境とは何か、ということに考慮して設計された評価項目から構成される
- 「量」の確保だけでなく、同時に「質」を高めることも重要だ、といったときに、SACERSには以下の2点が主に期待される
 - ①「やりやすいところからやってみよう」という改善の道筋や次のステップへのヒントを示すこと
 - ②共通の枠組み(客観的指標)を用いて自身の活動を振り返ることで、ごく基本的な事柄に抜けや漏れがあると気づくきっかけになること
- 本書は、放課後児童クラブ、と表記されているが、学童期の子どもたちの発達においてよい環境とは、という観点で行政の枠組みに関係なく世界共通で利用できるスケールなので、放課後子供教室や児童館などでも利用が期待される。

【項目一覧】

サブスケール1 ▶ 空間と家具	2	サブスケール4 ▶ 相互関係	54
1. 室内空間	2	27. 来所/帰宅	54
2. 運動できる空間	4	28. 支援員と子ども	56
3. ひとりになれる空間	6	29. 支援員と子どものコミュニケーション	58
4. 室内のレイアウト	8	30. 子どもの見守り	60
5. 生活の家具	10	31. 望ましい習慣・態度の育成	62
6. 学習とレクリエーションのための家具	12	32. 子ども同士	64
7. くつろげる家具	14	33. 支援員と保護者	66
8. 運動のための設備・用具	16	34. 支援員同士	68
9. 学校との連携	18	35. 支援員と担任教師	70
10. 支援員のための設備	20		
		サブスケール5 ▶ 育成支援計画	72
サブスケール2 ▶ 健康と安全	22	36. 日課	72
11. 衛生管理の方針	22	37. 自由選択活動	74
12. 衛生管理の実践	24	38. 地域資源の活用	76
13. 緊急時の対応	26		
14. 安全対策の実践	28	サブスケール6 ▶ 研修	78
15. 出欠席	30	39. 研修機会	78
16. 帰宅	32	40. 職員会議	80
17. 食事/おやつ	34	41. スーパービジョンと評価	82
18. 子どもの衛生習慣の確立	36		
		サブスケール7 ▶ 特別支援	84
サブスケール3 ▶ 活動	38	42. 特別支援を要する子どもへの対応	84
19. 製作	38	43. 個別対応	86
20. 音楽とダンス	40	44. 学習とスキルの向上	88
21. 構成遊び	42	45. 関与	90
22. 演劇	44	46. 子ども同士のやりとり	92
23. 言語/読みの活動	46	47. コミュニケーションの促進	94
24. 算数/思考の活動	48		
25. 科学/自然の活動	50		
26. 多様性の認識	52		

【スケールを使う際の心構え】

放課後の質に完璧な状態はなく
放課後の質を完璧に測れるものさしもない
今回はそのなかの「保育環境」(≒あくまで一部分)
についてを見える化する

注: 質を「見える化」するために、スコアはつきませんが、
人事評価や拠点の評価とは全く別の物である。

誰が観察評価するの？

スケールのルールに沿って研修を受けた者が行います。
調査研究としての精度と客観性を担保するために以下の
配慮を行います。

- スケール(ものさし)の使い方や解釈について評価者は事前に研修を受け、評価は必ず2名で実施します。
- 念のため、拠点のマネジメントに日常的には直接関わらない立場の人を評価者としてアサインします。
- 調査研究は専門家の監修のもと実施します。